

「春の七草」に聞く阿弥陀仏の救い

ご讃題 (Ref「仏説観無量寿経」注釈版聖典 P97,98)

「あきらかに聴け、あきらかに聴け、よくこれを思念せよ。仏、まさになんぢがために苦悩を除く法を分別して解説(げせつ)すべし。なんじら憶持して、広く大衆のために分別し解説すべし」と。この語を説きたまふとき、無量寿仏、空中に住立したまう。」

一、春の七草

「せり、なずな、<sup>ごぎょう</sup>御形、<sup>はこべら</sup>繫纒、<sup>すずな</sup>仏の座、<sup>すずしろ</sup>菘、蘿蔔、これぞ七草」といわれます。

一月七日(七日正月)の朝は七草粥で迎えられたことでしょう。

「菘(すずな)」は「蕪(かぶ)」であり「蘿蔔(すずしろ)」は「大根」であります。大根足等と揶揄されることもあって大根の語感あまりよくないのとは対照的に、「すずしろ」とはいかにも物事にこだわりのないすずしげな呼び名が懐かしい大和言葉であります。

【御形(ごぎょう)】は、一名、母子草とも呼ばれ、一説に「母子草」の名前は、母が何人もの幼児を抱きかかえている姿を彷彿させる「母」と「子」の人形(ひとがた)に由来すると言われていています。この母子草について著名な歌がいくつか残されています。

「老いて尚なつかしき名の母子草」高浜虚子

「あたゝかき人の情けや母子ぐさ」東條英機

東京裁判判決A級戦犯うち七人の方々が巣鴨拘置所の刑場の露と消えられたのでありますがそのうち四名の方々が花岡信勝<sup>教諭師</sup>のお導きにより浄土真宗の篤信のお同行として亡くなって逝かれました。

そのお一人の東條英機様が残された

「日も月も 蛍の光さながらに

行く手に彌陀の 光かがやく」は余りにも有名であります。

阿弥陀様のお救いを歌われた次の二首も残されています。

「さらばなり 有為の奥山けふ越えて 彌陀のみもとに 行くぞうれしき」

「明日よりは たれにはばかるところなく 彌陀のみもとで のびのびと寝む」

その東條様が巣鴨拘置所で見出された母子草と共にかつ子夫人に宛てて送られた歌が「あたゝかき人の情けや母子ぐさ」であります。

【仏の座】は、田平子(たびらこ)ともいいます。花の下にある葉が茎を包み込むようになっているところからこれを仏の「蓮華座」に見立てた名前であり、別名、サンガイグサ(三界草、又は三階草)とも称します。「三界」は衆生が生死流転する三つの世界(欲界、色界、無色界)を指します。花が数段につくことによると言われております。

「仏の座」と聞けば、仏説観無量寿経の「華座観(けざかん)」を思い起こさずにはおれません。観経第七華座観では釈尊が阿難尊者と韋提希夫人(いだいけぶにん)に向って仰せになります。「私は今そなたたちのために、苦悩を除く教を説き示そう。そなたたちはしっかりと心にとどめ、多くの人々のために説き広めるがよい」と

釈尊のこの御言葉と共に無量寿仏(阿弥陀如来)が端坐してではなく突如として空中にお立ちになります。阿弥陀仏が観世音菩薩と大勢至菩薩を伴って空中に來現して韋提希夫人に救いの御手を差しのべられたのです。そこでこれを「住立空中尊」と呼ぶのであります。

釈尊の言葉に合わせて阿弥陀仏が現れたといっているので、古来これを二尊一致(一教)と呼びます。二尊が心を一にして苦悩の人々を救おうとされていることの表れだからです。

釈尊は言葉でいて救いの法を示そうとされたのに合わせて、阿弥陀仏が現れたといっているので、夫人(ぶにん)が拝見した阿弥陀仏のお姿自体が苦悩を除く法であるといわれるのであります。

このことは、今日、私達が拝む「住立空中尊」を表したご絵像やお木像の阿弥陀如来は、そのままお釈迦如来が言葉による救いとして明らかにされた「帰命尽十法無碍光如来」そのものに他ならないという

ことを表す根拠であります。

浄土真宗の御本尊が「住立空中尊」であることは、ご絵像では、四十八本ある光明が上横のみならず下に向かって放射していることから伺われます。阿弥陀如来が端坐してではなく何故に立ち姿でお現れになったかということについては二つの意味があると言われています。一つには、阿弥陀如来の「わが国に生まれたいと思い取ってくれよ」との本願招喚の勅命を聞いて衆生が仰せの通りに「浄土往生したい」とお任せするときには、即ち、立ちどころに即ち浄土往生できる（立即得生（りっそくとくしょう））という意味が一つ、二つには、危急存亡の状態にある苦悩の有情をすぐさま救い取りたいとの阿弥陀如来の御心、立ちながら撮（と）りて即ち行く（立撮即行（りっさつそくぎょう））という謂れであります（Ref：梯實圓聖典セミナー観無量寿経 p165）

最後に「ナズナ」について伺ってみましょう。「ナズナ」は「ペンペン草」であります。そのように聞くと安っぽい雑草のイメージになるのでありますが、そのように考えるのは愚かな私の思いであります。その名の由来は、果実の形が三味線のバチに似ているためだといわれます。それだけではなく「ペンペン草」のよく稔った花茎を取り、果実を注意深く下向きに引っ張って茎と果柄を少し剥がして振ってみますと「シャラシャラ」と音がするそうであります。昔の人は随分注意深くご覧になっていたことが分かります。

「ナズナ」は、畑や水田、道端、荒れ地などに秋に芽生え、ロゼット（ ）で越冬し早春から開花を始めます。

注：短い茎に、扁平（へんぺい）な多数の葉が地面の表面に接して放射状についている状態、或いはそのような植物体をロゼットといえます。

「ナズナ」の花は次々に花を咲かせる「無限花序（むげんかじょ）」であり、下の方は先に咲いた花の果実が実りを深めつつ、先端部では次々と新たな蕾（つぼみ）を形成しては、尚も開花を続けて参ります。このような開花・結実の形式は、幸いにいち早く咲いた花には確実に種子

リビングライブズ 「春の七草」に聞く阿弥陀仏の救い

形成をもたらし、恵まれて余裕あれば更に多くの種子を形成しようとする戦略であり、痩せた土壌やいつ耕されるか判らない畑のような不安定な立地環境に生育するには適した仕組みだと言われるのであります。すでに花を見て結実しつつある果実、只今咲き誇っている花及び今から花開かんとする蕾が一本の茎に連なっている姿は、丁度浄土真宗のお同行が御爺ちゃんお婆ちゃんからお父さんお母さんにまた子や孫たちの世代に向けてお念仏のみ教えを連綿として引き継いで来られた姿に通じ、まことにほほえましくも尊いものを感じさせるのであります。

思えば、第十七願文・同成就文の御謂れによって人間世界で初めて阿弥陀如来のお名号を讃歎なさったお方はお釈迦如来様でありました。その名号讃歎の声を聞いて「名号の謂れ（まことに我国浄土に生まれたいと思い取ってくれよとの如来様の仰せ）」の通りに疑いなく受け止めることが浄土真宗の「信心」を頂戴することでありました。まことに、お釈迦様から七高僧、親鸞聖人、蓮如様、そのご縁に出遇うた我らが父祖のお同行がお念仏をお慶びになる後姿に導かれてこの私が念仏する姿は、本願念仏のみ教えをお聞かせに与り、み教えを次代に伝え、先達にみ教えを訪ね求める歴史であり「前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪らひ、連続無遇にして願はくは休止せざらしめんと欲す。無辺の生死海を尽くさんがためのゆゑなり（Ref ご本典 後序 安樂集のご引文（注釈版 p474））」のお心そのものであります。合掌（玄宥記）

正覚寺仏教壮年会例会	毎月第一日曜午後八時より
正覚寺仏教婦人会例会	毎月十六日午後七時より
著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)	
〒五二〇 〇五〇 一大津市北小松四五二番地 ☎&Fax 0七七 五九六 〇一六六	
☎-ℓ・mhkatata@pluto.dti.ne.jp 使務 堅田玄宥	

平成二十一年一月八日初版発行、二十一年一月十二日三訂版 2